OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	周易について
Author(s)	木村, 英一
Citation	懐徳. 1955, 26, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90283
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

周易について

木村英一

昔から口さがない人の言葉に、「漢學者は易と說文とを研究し始めたら、もうお終ひだ」、といふのがあります。つまり易や說文をやり出すと、わけのわからない理窟にならぬ理窟を言ひ出す、あれに興味を持ち始めた時は、同時に頭が變になり始めた時だ、といふのであります。これは皮肉な言葉ですが、その半面に於いて、易や說文が如何にむつかしいものであるかをよく示してゐます。——ところで今回の懷德堂講座には、私が易を語り、石濱先生が說文を講じられる、卽ち易も說文もあります。そこで賢明な皆樣は、「それでは懷德堂講座もいよ〳〵お終ひか」、とお考へになるかもしれませんが、とんでもないことです。どうか左樣に早まらないでいたゞきたい、懷德堂講座は漸く軌道に乘つて來たところで、これからこそ大いに發展するのであります。私の易はさて置き、石濱先生の說文に至つては既に定評がありまして、誰が見ても頭が變になつた說文などではありません、殊に近來圓熟されてます〳〵冴えてをられますから、どうか懷德堂講座の爲めに御安心を願ひます——。懷德堂のもとの顧問であられた狩野直喜先生、このお方は御存じのやうに、十三經に淹通された珍しい經學の大家でありました。私は大學の學生の頃から、時々先生のお宅へお伺ひして、色々御指敎を蒙りました。何をお尋ねしても言下に明晳な御指示を得るのでありますが、易の事を質問した時に限つて、何もお答へ下さらない、「易は難物だ」、と言つて澁いお顏をされるだけでありました。而も先生御自身は決して易に暗い方ではなく、殊に晩年——戰爭中——に大いに易を讀まれました。しかし私には、それが結局どういふ易であつたのか、終に窺ひ知ることが出來ません。傳說によりますと、あの偉い孔子が、やはり晩年

になつてから易に熱中されて、韋編三たび絕ゆ――革でとぢた書物が何度もすり切れた――と傳へられ、恰度それと相應じて、論語の或るテキストには、「子曰く、我に數年を加へ、五十にして以て易を學はゞ、以て大過なかるべし」（述而篇）とあります。私は、これは傳說であつて事實ではなからうと思ひますが、ともかく、狩野先生の事實にせよまた孔子の傳說にせよ、いづれも、易が大層むつかしいものであること、大學者でも晩年になつてはじめて妙味がわかる程で、餘程學問が圓熟しなければ扱ひ切れるしろものではないこと、を表明してゐると思ひます。ところでこのむつかしい易をば、私のやうな未熟なものが、これから短時間でお話しようといふのでありますから、果してどこまで肯いていたゞけることが言へるか、甚だ疑問であります。どうか眉に唾をつけて、はぐらかされぬ樣に聞いていたゞきたいのであります。

先づ、易とは一たい何者でせうか。――今日傳はつてゐる易は、もとより一時に完成したものではなく、長い成立の歷史がありますが、今は出來上つたものとしての現存の易がもつてゐる性格を包括的に考へてみませう――。古來易について色々に言はれてゐるところを煎じつめてみますと、先づ易は占筮の書物であり、而も義理――哲學――の書物であると共に、象數――數理を象徵的に使用する技術――の書物である、といふことになります。つまりこれをまとめて言へば、天下の道理をば、數理的象徵といふ方法で表現し、それに基いて未來の運命の吉凶を占ふ書物なのでありまして、話は始めからこみ入つてをります。そしてこれが、中國に於ける占ひのバイブルであると同時に、儒教のバイブルの一つになつてゐるのであります。

さて、現在傳はつてゐる易――それは周易ですが、古代には周易以外の易もあつたと言はれてゐます――は、經上下と十翼との十二篇から成つてゐます。十翼といふのは、彖傳上下・象傳上下・文言傳・繫辭傳上下・說卦傳・序卦傳・雜卦傳の十篇である、――この十翼の數へ方や狀態についても、古代の易では色々問題がありますが、大體今か

ら二〇〇〇年位前には、既に今日のやうに定まつてゐることは確かです。そして古來の傳說によりますと、經上下は非常に古くから傳はる易の本文で、十翼はそれを孔子が解釋された書物、といふことになつてゐます。もつとも近頃の研究では、十翼が孔子の作ではないことはほゞ確實であつて、おそらく孔子の歿後二三百年を經たB.C.三―二世紀に亘つて成立したらしく思はれますし、今日の經上下も亦、大體その頃又はそれより少し前位にまとまつたものかと考へられます。しかしそれにしても今から二二〇〇年以上前のことです――。

經上下の構造は、八卦を重ねて作つた六十四卦から成つてゐます――六十四の卦がズラリと並んでゐるのが經上下です――。一たい易では、陽を⚊であらはし、陰を⚋であらはしてゐる、――陰とは何、陽とは何であるかといふことは、大層むつかしいのでありますが、大體何ごとでもすべて表と裏、上と下、前と後、始と終…等、見方に應じていろいろな兩面が見られ、表が陽ならば裏が陰である、場合に應じていろいろ陰陽を當てますから陰や陽に必ずしも定まつた內容はありませんが、すべて相對的に言つて積極的な性質が陽、消極的な性質が陰である、かくてすべての事物を、陰と陽との關係から出來てゐるものと見てゐます。ですから易では、この陰陽が、宇宙間のすべての事物を構成してゐる所の第一次的な原理です――。この陰⚋と陽⚊とを三本づゝ組み合せてみると、八通りの場合が出來る、これが有名な八卦（バック）であります。☰乾、☷坤、☳艮、☱兌、☲震、☴巽、☵坎、☶離、（八卦の順序の問題もありますが今は觸れません）この乾・坤・艮・兌・震・巽・坎・離の八卦は、それぞれの場合に應じて、これで以て種々のものを象徵させるのでありますが、その代表的な一例を取るならば、例へば乾は天、坤は地、艮は山、兌は澤、震は雷、巽は風、坎は水、離は火をあらはします。そしてこれ等を八つの要素とし、これ等八要素を二つづゝ組み合せた種々なる合成によつて、宇宙間のあらゆる事物が成立するものと見られてゐるのであつて、いはゞ八卦は宇宙間の萬事萬物を具體的に組み立てゝゐる八つの要素（エレメント）であり、前の陰陽が萬事萬物の第一次的な構成原理であるのに對して、八卦は第二次的な構成原理といふことになります。そしてその場合、この八卦を二つづゝ重ねて組み合せますと、八八六十四通りの組み合せ（コンビネーション）

が出來る、卽ち䷀乾、䷁坤、䷂屯、䷃蒙、から始まつて䷾既濟、䷿未濟、に終る六十四、これが六十四卦でありまして、これで宇宙間のあらゆる事物の複雜な變化を六十四通りの主要な場合に代表させて象徴し、人がそれ等の場合に處する際の行爲や態度の吉凶（結果のよしあし）を判斷する基礎にしようといふのです。尤もこのうちで䷀乾と䷁坤とは、あらゆる事物の變化を象徴する六十四の基本形態の通則といふ意味を含み、いはゞ親卦（おやクワ）であつて、他の六十二卦の象徴してゐる具體的な意味を判斷する場合のモデル・ケースになります。そしてその他の六十二卦の象徴は、例へば䷂屯（震下坎上）ならば、何事でも事業をはじめたばかりの創業多難の狀態をあらはしてをり、その際に人は如何に身を處すべきかを暗示してゐる、また䷅訟（坎下乾上）ならば、人々の間に爭ひが生じて訴訟がおこつた場合を象徴してをり、そして訴訟は如何にすべきものであるかを示唆してゐる。また䷆師（坎下坤上）ならば、戰爭とか土木工事とかいふ國家的な仕事に人民を使ふには、如何なる點に注意すべきかを教へてゐる、また䷋否（坤下乾上）ならば、天下が亂れて道理が通用しない世の中に於いて、君子は如何なる態度で臨むべきであるかを表現してゐる、また䷌同人（離下乾上）ならば、志を同じくする友人が互に連絡し合つて事を行ふ場合の種々の在り方を說いてゐる、——といふ調子です。

こんなわけで、易の組み立ては、先づ一番原理的な陰陽二爻を重ねて八卦を構成し、八卦を重ねて六十四卦を構成し、六十四卦であらゆる事物の變化を具體的に象徴させてゐるのですから、一見大層合理的系統的で、今日の自然科學に於いて、あらゆる物質は分子から構成され、あらゆる分子は原子から、原子は更にエレクトロン・プロトン・中間子等から構成されてゐると見られてゐるのと、多少似通つてゐるやうです。しかしそこには、實は根本的な違ひがあります。何故かと言へば、自然科學では、物質の事實上の構造が明かにされてゐるのですが、先づ易の對象は物質ではなくて、人間が生活する上に出遭ふあらゆる事件や事柄の吉凶可否である、次に易の組織は、その事件や事柄の吉凶可否の事實上の構造ではなくて、それを象徴的に表現する記號上の構造です。成る程記號の構造から言へば、陰

と陽一とを示す記號を三本づゝ積み重ねると八卦が出來、八卦を二つづゝ積み重ねると六十四卦が出來、六十四卦で人生のあらゆる主要な場合が代表的に示されてゐるのですから、記號の方は數理のコンビネーションに從つて系統的構成的に出來てゐます。しかしその記號によつて象徴されてゐる所の對象の側——卽ち一本づゝの記號で示されてゐる陰と陽、三本づゝの記號で示されてゐる天・地・山・澤・雷・風・水・火等の八つ、六本づゝの記號で示されてゐる創業……戰爭……訴訟……等の六十四、等の相互關係——には、今日の我々から見れば、少しも系統的・構成的な關係はありません。たゞその樣な系統的な記號でその樣な雜然たる事物を象徴したものとする、といふ約束になつてゐるだけで、いろいろ理窟はついてゐますが一向すぢは通りません。言はゞ、事物の事實上の構造とは無關係に、一連の記號の體系を勝手に作つておいて——その記號の系列の方はなるほど數理的・系統的に出來てゐるのですが——さてあの事物とこの記號とを對置し、一々の記號が一々の事物を象徴するものとする、といふ約束になつてゐる、これは誠に一方的に强引な約束で不合理千萬なやうですが、そこは「象徴」といふ都合のよい概念がうまく調定してくれます。若し事物の事實上の構造とそれの正確な記述とであるならば、事物の精密な實驗・分析・歸納等と正確な論理とによらなければなりませんから勝手な動きはとれませんが、象徴的な構造とそれを直觀的に表現する記號といふことならば、適當にゆるやかな約束を決めておきさへすれば、或る記號でどんな事物をでも象徴出來ます。ですから人生の經驗に基いて、創業とか、戰爭とか、訴訟とか、結婚とか……等の六十四の代表的な事物を選んでおき、それ等の一つ一つを、八卦を二つづゝ重ねた構造をもつ六十四の記號の一つ一つで象徴させるといふ約束を決めることは出來るのでありますが、たゞその場合、☳雷の上へ☵水を重ねた䷂屯が何故創業を意味するのか、☵水の上へ☰天を重ねた䷅訟が何故訴訟の意味になるのか、等いふ記號の構造が內容を意味づけてゐる理由の問題になりますと、易を扱ふ人々がそれぞれ、一々の場合に當つて、直觀的な想像力や創作力をはたらかせて辻褄を合せるより外はありません。——ですから易の書物程、讀者に取つて割の惡い書物はありません。元來對象とは無關係な構造をもつ記號

を並べておいて、そして讀者の責任に於いて、對象と記號の構造とが密接微妙な對應關係をもつものとして理解することを要求してゐるのです。ですからその要求に應じる爲めには、讀者の賴り得るものは、直觀的な想像力や創作力の外はありません——。ですから易の構造は、實は系統的・構成的・合理的なものではなく——系統的なのは記號の作り方だけでありまして——、易自體は極めて直觀的・象徵的・神祕的なものであります。かくて易は、科學的な考へ方とは、目的も方法も違つてゐます。例へば科學では、水の構造は H_2O である、これは事實上の構造であつて、一定量の水素と酸素とを化合させれば、實際に水が出來ます。ところが易では、例へば☳屯ならば、創業多難の狀態を示して居り、その構造は水と雷とから出來てゐる、これを更に具體的に言ふならば、例へば私の屬してゐます大阪大學の文學部は、開設以來滿五年餘りでありまして、お蔭で大分軌道に乘つて來たのでありますが、少くともこの五年間は創業時代で、易で言へば屯（チュン）である、ところで屯の構造は水と雷とから出來てゐる、そこで淀川の水でも汲んで石橋あたりへ置いておき、何處かから雷を誘導して來てその水の中へ放電する、するとチュウンとか何とか言つて大阪大學文學部が合成される、——といふ樣なわけには參りません。水と雷とを組み合せて屯が出來てゐるといふことは、事實としての構造を示したものではなく、象徵としての構造を示したものでありまして、それの象徵する具體的な意味は、個々の具體的な創業の場合に應じて直觀的・創作的に理解するより外はないのであります。その邊のことを混同しますと、易をやつた奴は頭が變だ、といふことになりかねません。もつとも易の成立しましたのは二千數百年も昔でありまして、當時の意識としては、これで充分合理的——神祕的なものを合理的な形で表現し得た——と考へてゐたでありませう。第一、當時では、數理といふものを、合理的であると同時に、一面非常に神祕なものと見てゐたのでありまして、易では、占ひの神祕性に對する信仰と、數理の神祕性に對する信仰とが同一視され結合されることによつて、逆に占ひに對して數理的な理論附けを賦與したことになつてゐる、ですから當時としては、これで、宇宙の神祕性に對する最も合理的な、最も進步した究明と思はれたのであります。また實際今日から見ても、古

代のものとしては大層すぐれた哲學で、その影響も大きく、思想史的には甚だ重要なものであり、また象徴といふ立場の面白さやその直觀の鋭さなどは、今日でも若干の興味をそゝられます。

さてこの易の經上下の六十四卦には、それぞれ神聖な説明の文がついてゐます。先づどの卦にも、その卦全體としての説明がありますが、これが卦辭である、次にその卦を構成してゐる六本の一又は⚋——これを爻と言ひます——の一本づゝについて説明がある、これが爻辭です（この六本の爻は、下から順番に數へて初・二・三・四・五・上と言ひ、陽爻は九と言つて初九・九二・九三・九四・九五・上九、陰爻は六と言つて初六・六二・六三・六四・六五・上六、と呼ぶ約束になつてゐます）。ところがこれ等卦辭・爻辭の文は甚だ不思議なわかりにくいものです。これはおそらく昔から傳はる占ひの神秘な言葉に、俚諺や格言の趣を搗きまぜて作つたのではないかと私は思ひます。しかしともかくこれによつて、六十四卦の各〻が何を象徴してゐるかゞ示されてゐるわけです。

六十四卦がそれぞれ何を、また如何なる意味を象徴してゐるかは、甚だわかりにくいのですが、それを理解する爲めに基本的な思想を説いたのが十翼です。實際十翼が無ければ、易の意味は殆んどわからないでせう。しかし十翼がどこまで經上下の眞意を得てゐるかは容易に定められぬことであり、また十翼自體が決してわかり易いものではなく更に十翼の中でも、彖傳・象傳（その中でも大象と小象）・文言傳・繫辭傳・説卦傳・序卦傳・雜卦傳等、それぞれの間に多少づゝ立場のずれがあるやうで、易の眞意が何であるかは結局なかなかわかりません。今、こゝで六十四卦及び十翼の文が如何に讀みにくいものであるかについて、一例を擧げてお目にかけておきませう。六十四卦のどれを取つてもよろしいが、假りに今まで何度も例に取つた屯の卦を擧げてみますと、次の樣に書かれてゐます。

☳☵ 震下 坎上 屯、〔元亨利貞、勿レ用レ有レ攸往、利レ建レ侯、〕

〔彖曰〕屯剛柔始交而難レ生、動二乎險中一大「亨」「貞」、雷雨之動滿盈、天造二草昧一、宜レ建レ侯、而不レ寧、

〔象曰〕雲雷屯、君子以經綸、

初九、磐桓、利レ居レ貞、利レ建レ侯、

〔象曰〕雖二磐桓一、志行正也、以レ貴下レ賤、大得レ民也、

六二、屯如、邅如、乘馬班如、匪レ寇婚媾、女子貞不レ字、十年乃字、

〔象曰〕六二之難、乗レ剛也、「十年乃字、」反レ常也、

六三、即レ鹿無レ虞、惟入二于林中一、君子幾不レ如レ舎、往吝、

〔象曰〕「即レ鹿无レ虞」、以従レ禽也、「君子」「舎」レ之、「往吝」窮也、

六四、乗馬班如、求二婚媾一、往吉、无レ不レ利、

〔象曰〕求而往、明也、

九五、屯二其膏一、小貞吉、大貞凶、

〔象曰〕「屯二其膏一」、施未レ光也、

上六、乗馬班如、泣血漣如、

〔象曰〕「泣血漣如」、何可レ長也、

この文についての私の解釋を申し上げてもよろしいのですが、時間がかゝりますので割愛しておきます。しかしこれだけの文を御覽になつただけでも、易が如何に讀みにくいかを御理解下さつたことゝ思ひます。

古來の記錄によりますと、易の成立については、いろいろな傳說がありました。最も有力な說を一二御紹介しますならば、先づ八卦を作つたのは太皞伏犧氏（中國最古の神話的帝王）、これには異說はありません。次に八卦を重ねて六十四卦にしたのは、或は伏犧自身、或は神農、或は夏の禹王、或は周の文王等とされてゐる、また卦辭と爻辭とについては、共に文王の作とするもの、卦辭は文王、爻辭は周公とするもの等があります。そして十翼は孔子の作だといふので

す。そこで昔から、易は多くの聖人達が相承けて遂に完成したもので、この上もなく深遠な哲理を含んだ、この上もなく尊い書物、といふことになつてゐます。しかしこれ等はすべて傳說であつて、事實ではありません。

こんなわけで、易は、何時誰によつて作られたかといふ確かな事實もよくわからず、また如何に讀み如何に理解してよいのかもよくわからない、といふ厄介至極な怪物であります。しかし太古から神聖視されてゐた占ひのバイブルとして作られたものであるとか、また、古代のものとしては一種すぐれた世界觀・人生觀を展開してをり、古代の思想史上に於いて重要なものであると共に、後世の中國思想に與へた影響が甚大であるとかいふことは、これは疑ふべからざる事實であります。占ひそのものの淵源の遠く深いことは、例へば殷墟の發掘物を一見しただけでも疑ふ餘地はなく、また後世の中國思想に對する易の影響の大きいことは、易が儒教の經書の一つに數へられて、文化のあらゆる方面に於いて、原理的な問題にはいつでも根據とされてゐる點から見ても、あまりに明白である、但しその全貌を說明するとなると、到底短時間には出來ませんから、今は省略しておきます。

ところで易を語る以上は是非考へねばならないことがあります。それは外でもありません、一たい易の占ひは實際に當るものなのであらうか、換言すれば、易の中には、實際、未來を豫知することが出來るだけの充分な道理が含まれて居り、正しく扱ひさへすれば正確に未來が豫知出來るのだらうか、それとも神聖なもの、深遠なものとして祭り上げられてゐただけで、要するに迷信に過ぎないのだらうか、——これは誰でもつき止めておきたいことだらうと思ひます。昔から、不思議な程正確に易の豫言が當つたといふ話はいくらでもありますが、また「當るも八卦、當らぬも八卦」等と言ひますと、何だかインチキの樣でもある、何しろかういふ不可解な書物ですから、口さがない連中はいろいろなことを申します。例へば、眞僞の程は知りませんが、或る易者は、相場が上るか下るか、といふ相談を受けますと、或る人には上ると言ひ、又或る人には下ると言ひ、百人のうち五十人には上る、五十人には下ると答へて

おく、いづれにしても半分は當るわけで、半分當れば結構商賣になるといひます。またかういふ話があります。昔ある所に不思議によく當る易者があつて評番が高かつた、その家へ行つて見ると、座敷に赤・白・青・黄・黒……といろいろな色の座布團が並べてある、そのわけを尋ねると、陰陽五行に則ると、勿體ぶつて答へる、ところが實はそれが手であつて、客の待合室には接待の書生が居て、客の雜談の相手をしながらそれとなく客の惱みを聞いておく、さてその客の順番が來て座敷へ案内する時、例へば緣談ならば赤い布團、病氣ならば白い布團等とあらかじめ打合せがしてあつて、その色の座布團へ案内する、すると易者先生、何喰はぬ顔で、客が口を開くより先に、「お顔の相を拜見すると緣談の御心配らしいな」、と先手を打つ、そこで客は一も二もなく感心して暗示にかゝつてしまふ、といふのです。これ等はもとよりインチキですが、しかしインチキと言へば何も易に限つたことではなく、どこにだつてインチキはあります。その上、いくら易にインチキが多いにしても、我々はインチキを相手にする必要は少しもありません。我々の知りたいことは、インチキではなく、正當に約束通り易の占ひをした場合、果して當るものか、當らぬものか、といふことであります。

私は生れつきの傾向から申せば合理主義者であります。勿論超合理的な、例へば宗教的眞理の如きものは認めてゐるつもりですが、少くとも何事でも不合理な說明のまゝでは滿足することが出來ない性分で、立派なことでも條理の立たぬ表現で說明されると容易に受け入れられない、くだらぬことでも條理を立てゝ言はれるとつひ耳を傾けたくなる、餘程注意してゐるつもりですが、生來の傾向にはさういふところがあります。こんな人間には易などは到底わからないのかもしれませんが、敢て私の所感を率直に申しますならば、易のやうな性質の占ひは、世故に長けた、處世の良識のみがかれた立派な人が、專心にやればよく當ります。しかし不眞面目な人や人生の經驗の淺い叡智の乏しい人は、いくら占つても當りません。その理由は、後にも觸れますやうに、易の言葉の示唆するところ、或は易の構造がおのづから要請してゐる方向が、深い人生の經驗や、冴えた處世の良識によつてはじめて正しく理解出來る所の、

社會生活上の豫想であるからであります。中庸の中に

至誠之道、可ニ以前知一、國家將レ興、必有ニ禎祥一、國家將レ亡、必有ニ妖孼一、見ニ乎蓍龜一、動ニ乎四體一、禍福將レ至、善必先知レ之、不善必先知レ之、故至誠如レ神、

とありますが、これは誠心誠意を以て國家の狀態を注意深く觀察する人の目には、國家の興亡禍福の前兆が、占ひの上にも、また人々の行爲の上にも發見される、といふのであつて、易のやうな性質の占ひの本質をズバリと道破してゐると思ひます。しかしそれならば、何も不思議なことはない。名醫がよく病氣の經過を言ひ當てたり、偉い政治家の勘が世界情勢の成り行きを先見したりするのと同じで、——過日の大戰の際にもチャーチルの政治的勘が割合ひによく當つたと言はれてゐますが、それと同じで——、世故に長けた人の處世の良識が、よく事件の將來を見通して身を處するに誤らないといふことは、何も易のせいではない、そんな偉い人ならば、易の占ひによらなくても出來ます。結局易だけに特別な未來を豫知する眞理があるわけではない、といふことになりませう。中國の古典にも、例へば莊子の庚桑楚や管子の心術下・內業等に、「能无ニ卜筮一而知ニ吉凶一乎」とあるのは、つまりその意味です。もつとも易の占ひを本式にやりますと、一度立てるのに三十分位かゝりますが、——私はあの技術は拙いのですが——、あの技術に熟達した人は、恰度名人が手なれた道具を取つて仕事にかゝつた時のやうに、精神が統一して無心になり、異常に頭が冴えて來ます。ですから世故に長けてゐると同時に易の技術にも熟達してゐる人ならば、異常に頭腦の冴えた狀態で事態を觀察することになり、特別に易の占ひがよく當る理です。して見ると、易の當るのは一種の名人藝だと言へませう。こんなわけで、易は必ずしも當らぬものではないのですが、誰がやつても必ず當るといふわけのものではない、むしろ餘程特別な偉い人でない限りは當らないのが普通で、大多數の人は、これに熱中すれば、かへつて迷信に墮してしまひます。ですから我々現代人は、若し未來を豫知したいのならば、——今のところ充分確實な科

學的方法はまだ發見されてゐませんが――、名人藝ではなく、誰がやつても間違ひのない普遍性のある合理的な方法――誰にでもマスター出來る程度の若干の技術を體得しさへすれば、誰がやつても必ず當るといふ方法――を案出すべきでせう。そのやうな方法による場合にはじめて科學的と言へませう。ですから今日の場合、少くとも單なる「占ひ」といふやうな迷信的なことは、遊戲としてならば兎も角、眞面目に取り組めば百害あつて一利もない場合が多いと思ひます。

それならば、――一般的には害の方が多いのならば――、易を讀んだり扱つたりすることは止めたらどうだらう、何なら法令で禁じた方がよいかもしれない、といふお說も出るかもしれません。誠にごもつともです。しかし私は、それとは別の意味で易の價値を高く評價するものであります。もとより最初から易には興味のない方は、强ひて易を學ばれる必要はございません。しかし易の成立過程の歷史的事實や、歷史的事實としての易の種々なる取り扱ひ方など――これ等を究明するのはもとより大切なことですが――とは別に、經書として出來上つてゐる易の敎が、今日の我々に對して何等かの敎訓的意味に應用し得るかどうかを考へてみますと、この何とも讀み難い易の中には、一種犯し難いところがあることも嚴たる事實のやうです。と言ひますのは、昔から易に對して、幾多の俊才が精根を涸らしてゐる、從つて今日から見れば、幾多のすぐれた人々の精根を涸らした體驗を集めて易が完成されたといふ結果になつてゐる、といふのが眞相かもしれませんが、ともかく多くのすぐれた人生の體驗が、たしかにこの中に織り込まれてゐる、これが易の偉いところであり、おそろしいところであります。もつとも古來の傳說のやうに、伏羲・神農・禹王・文王・周公・孔子等いふ聖人達の合作である、などいふことは事實ではありません。しかしこの傳說を文字の表面通りに受けとることをしないで、假りに易の象徵主義を勝手に應用して、この傳說を、「幾多の第一流の人物のすぐれた人生體驗が、易の中には含まれてゐる」、といふことの象徵的表現と見立てて見るならば、――事實はこの傳說は、そのやうな象徵的意味を表はす爲めに作られたものではないでせうから、これは勝手に玩んだ私の解釋で

すが――、かへつて事實を或る程度まで象徴する結果になるのではないでせうか。何とならば、實際易をよく讀み味はつてみますと、叙智に富んだ意味深い言葉が、至るところに光つてゐるのを感じるからであります。たゞ困つたことには、それ等の珠玉のやうな短い言葉が、何とも言へない奇妙な聯關の仕方で並んでゐるのであつて、結局何を言つてゐるのか論理的にはよくわからない、そこで止むを得ず、易學の傳へてゐるいろいろな約束に從つて何とか解釋してみますと、さつぱり頭が變になつた人のやうな理窟にならぬ理窟になつてしまふ、といふわけなのです。そこで、これはどう扱へばよいのか、といふ問題が起つて來ますが、これについては一つの譬喩をお考へ願ひ度いと思ひます。大層變な譬喩で恐縮ですが、假りにこゝに一つの家がある、非常に古い家で、天井は低く、窓は小さく、中はまつ暗で、住宅や事務所にはおろか、物置きにさへ使へない、とします。このやうな家をどう扱へばよいかと言へば、場所ふさぎだから毀つてしまへ、何ならめんどうだからたき物にしてもよい、といふことになりませう。ところがその役に立たない家が、若し、柱と言はず、天井と言はず、床と言はず、すべてが非常に立派な木材で出來てゐるとすれば、どうすればよいでせうか。おそらく、その家を丁寧に解體して、木材として利用するがよい、と言はれるでせう。ところが更にその家が、――今も言つた通り何の役にも立たない、むしろ木材として役立つ家なのですが――、柱から壁へかけ、或は壁から天井へ亘つて、その他あらゆる部分に相互に跨り合つて、寸分のすき間もなく非常にすぐれた圖案なり雕刻なりが施されてをり、その意味では一本の枘、一枚の板も動かせない、と假定するならば、そのやうな家はどう處理すればよいでせうか。――かうなつたら仕方がありません。恰度法隆寺のやうなもので、國寶に指定してそのまゝよく保存する措置を講じ、藝術家や學者が隨時に就いて研究し得るやうに、一般人が隨時に參觀して樂しめるやうに施設を講じるべきであります。――これは家のたとへですが、易の書物は恰もこのやうなものである、文章は讀めもせず、何とか讀んでみても理窟にならぬ理窟で、むつかしいばかりで一向役に立ちません。しかしその部分々々を構成してゐる言葉には、實に立派な言葉がある、そしてその言葉が變な連り方をしてゐま

すが、それによつてかへつてあちらこちらに、實に深い人生の體驗が象徴される結果となつてゐるので、分解してしまふわけにも行きません。そこでこのやうな書物は古典としてそのまゝ大事に保存することゝし、心ある人が隨時に味はつて、或は歴史を研究する史料とし、或は座右の銘とか心の支柱とかにし得るやうにしておく外はありません。こんなわけで、今日では易は、歴史的な研究の對象とするのでなければ、——若し經書としての性質を應用して、行爲の指針とか教訓とかに用ゐるのならば——、下手に占ひに使ふよりも、我々が時に應じて味讀して、そこからすぐれた人生の智慧を掴みとるべきものではなからうかと——私はかう思ふのであります。

私のやうな未熟なものは、時に人生の大先輩とも言ふべき人に出遭ひますと、ほんとうに頭の下がる思ひがいたします。すべてどの方面でも、それぞれの道に於いて深い經驗を積まれた眞の意味の「苦勞人」といふものは、偉いものだとつくづく思ひます。かういふ人になりますと、お氣に入りさうなことを言つて喜ばせてみてもニッコリともしてくれない、高飛車に出て威してみてもビクともしない、あの手この手とかけ引きを用ゐてみても一向に乘つてくれない、そしてこちらが切り札にしてゐることはチャンと見破つてゐて、こゝといふところになると向ふから先手を打つて來る、これが苦勞人なるものゝ性格でありまして、こんな人に立ち向つてはとうてい齒が立ちません。ところが易を讀んでゐますと、恰度このやうな、とても偉い苦勞人に立ち向つてゐるといふ感じなのです。こちらが苦勞してやつと考へついた事は、よく見ると易はチャンと知つてゐて、初めからさう書いてある、——私はさき程申し上げましたやうに、今日では易は下手に占ひに使ふよりも、我々が時に應じて味讀して、そこからすぐれた人生の智慧を掴みとる、——人生の智慧についての思索の示唆を受ける——べきものではなからうかと考へました。これは實はやつとの思ひでその考へに辿りついたのであり、平凡ながら易の内幕の少くとも一部を覗いたつもりでをりました。ところが、昨夜もさう考へながら易の本をペラペラ繰つてをりますと、何と驚いたことには、易の書物には初めからチャンとさう書いてあります。卽ち繫辭傳上に

是故君子所二居而安一者、易之序也、所二樂而玩一者、爻之辭也、是故君子居則觀二其象一而玩二其辭一、動則觀二其變一而玩二其占一、是以自レ天祐レ之、吉无レ不レ利、

とある。このうち「君子」が「象を觀て辭を玩ぶ」といふのが私の今言つた意味であります。しかしそれと並べて、「變を觀て占を玩ぶ」といふ占ひの場合でも、――これは先程私が、占ひが當るためには名人藝が要求されると言つた場合ですが、またそれ故にこそ――「玩ぶ」と言ふ主體的な言葉を使つてゐる、つまり占ひを見てすぐその結果に執着するのではなく、占ひを玩味し、叡智をはたらかせて、そこからその事に處する態度について示唆を得ようとしてゐるのであつて、結果の吉凶だけを切り離して知りたがる俗間の占ひとは心構へが違ひます。要するに「君子は易の言葉なり占ひなりを味解して、そこからすぐれた人生の智慧を掴みとるべきである」といふのですから、私の考へたことは皆初めから易に書いてあつたわけです。これには明かに先手を打たれました。そこで私は考へました。先手を打たれて殘念だけれども、これは易が自分でさう言つてゐるのだから、果して私の考へは正しかつたのだ、それならばもう一歩突込んで、易のもつてゐるこのすぐれた人生の智慧とはどういふ性質のものだらうか、その内容を發いてみよう、思ふに易の六十四卦には、人生のあらゆる主要な場合が象徴されてゐる、從つてあらゆる困難な場合に處する教へがすべて含まれてゐる、そのうへ易の辭によれば、――一々例はあげませんが――、吉の場合でも手離しで喜ばさず、一層の戒愼や努力を要求し、凶の場合でも、處する道を誤らないことによつて、多くは「咎無し」・「悔亡ぶ」となる、――これは誠に唆へないところで、苦勞人らしい判斷の仕方です――。してみると、易の中には、あらゆる困難な經驗を嘗めた餘程苦勞した人の體驗が集まつてゐるに相違ない、――もとより一人や二人の體驗ではないでせうが――、要するに決して泰平無事の世の中に出來た書物ではないであらう、少くともその多くの部分には、例へば戰國時代のやうな亂脈を極めた世の中を生き拔いて、鍛へ上げられた多くのすぐれた人々の體驗が集つてゐるのであらう、さう考へると、いろいろな點でよく辻褄が合つてくる――とかう考へたのであります。ところがどうでせ

う、それもチャンと易に書いてあります。「子曰、作レ易者、其知レ盗乎」（繫辭上）――盗人の實情までチャンと心得てゐるのであります――。「易之興也、其於二中古一乎、作レ易者、其有二憂患一乎」（繫辭下）、――餘程心配事の多かつた人が作つたに相違ないといふのであります――。「易之興也、其當二殷之末世、周之盛德一邪、當二文王與レ紂之事一邪」（同上）、――傳説によりますと、殷の末世、紂王が暴虐を極めた時に當つて、一諸侯であつた周の文王は聖人の德をもち、天下の人望が三分の二まで自分に歸してゐるに關らず、君臣の大義を重んじて臣として紂王に仕へた、ところが紂王の暴虐はつのるばかり、終に理不盡にも文王を拘へて羑里の獄に繫ぎました。文王はこの大いなる憂苦の中で易を研究したといふことになつてゐます。勿論これは傳説であつて、歷史的事實とは思はれません。しかし假りに易の象徵主義を勝手に玩んで、この傳説も、事實をあらはすよりも、文王で象徵されるやうな最上級のすぐれた人物が、紂王の暴虐で象徵されるやうな最大級の理不盡な仕打に遭ふといふ、いはゞ人生に於ける最大級の苦しみや憂ひが易を産み出したことを象徵してゐるものと見ると面白い、そしてこの勝手な解釋が、結果としてはかへつて易を讀んだ時の實感と符合します――。してみると、私がやつとの思ひで辿りついた結論は、易にチャンと初めから書いてある、また先手を打たれてゐるのでありまして、いよいよ以て對手は手におへない海千山千振りです。

こんなわけで、私は今まで何度も易を讀みましたが、讀む毎に先手々々を打たれて引き下つてゐる始末でありまして、今のところ、易は到底私の手に合ふ對手ではありません。しかしこゝで一言負けおしみを言はせていたゞきますならば、私の考へたことは、すべて易が自分で言つてゐることばかりなのですから、間違ひはないものと思ひます。そこで敢て申し上げますが、皆樣の中で易がお好きなお方は、占ひもとより結構ですが、これは餘程しつかりやらないとめつたに當りません。當らないばかりか、往々科學的精神を無視する結果になつて、いろいろ弊害を生じ、はては常識をさへ疑はれます。それよりも、君子である皆樣は、時に應じて易を味讀され、その辭を玩びその占を玩んで、そこからすぐれた人生の智慧を掴み取られるがよからうかと思ひます。再び繫辭傳の言葉を引きますならば、

「これ故に君子の居て安んずるところは易の序なり、樂しんで玩ぶところは爻の辭なり、これ故に君子は、居らば則ちその象を觀てその辭を玩び、動かば則ちその變を觀てその占を玩ぶ、こゝを以て天よりこれを祐けて、吉にして利せずといふことなし」、であります。